

「一人息子からのエール」

大阪の両親から一通の封書が届いた。そこには息子の作文が入っていた。以下である。

僕の母は現在 50 歳。母と僕は 2 人暮らしをしていた。父とは高校受験前に揺れる僕の気持ちを察した母が、一度だけ合わせてくれた。僕が生まれて 15 年間「母は絶対に父の悪口を言わない。」と、祖父母は口をそろえて言っていた。僕はまだ見ぬ父に対して、あれこれと理想像を描いていた。しかし、目の前に現れた父は、昼間からビールを飲みタバコをふかし、薄汚れた男だった。「なんやこいつは？」と心の中で思った。この頃の年代の男子は成長過程において妄想で父親を殺すと、母の本棚にある心理学の本にあった。しかし、目の前の父は、そんな妄想の対象にすらならなかった。僕は落胆した。立派な父親を超えようとしていたが、超えるべき相手がなくなった絶望的な瞬間だった。

さて、一方母は、僕を育てるために必死に稼いでいた。僕がアトピーになれば大阪から、田舎へ引っ越し、野山を一緒にかけまわる。僕が一時間に一本の電車しかない高校に通うと、高校近くの一軒家へと引っ越す。パワフルな母だ。そして僕が高校二年生の時、母が何かの勉強をしていた。新しい会社に行くと、その会社にあわせて、危険物乙四類やフォークリフトの免許まで取ってしまう母だ。また何かの資格を取るのかなと思った。そして冬休みに入る前、我が家が騒々しくなる。「お母さん、春から看護学生だからね」僕は「え？なんて言った」と聞き返すと、「看護学校に受かっちゃった」かわいい声で答える母は、看護学校の合格通知書を見せた。僕の高校のための転居で転職したが、勤務先が業績不調にてリストラされた母は、なんと、近所にある看護学校に受かった。僕の高校の先輩が唯一 1 人だけ合格したという学校に通うらしい。改めて「なんて人なんだろう」と驚いた。

翌年の春、高校三年生の受験生である僕を放置し、母はリクルートスーツを着て 10 代の子に混ざり看護学校の入学式を済ませた。そして、学生時代は赤点だった物理で 97 点を取ったと喜びはしゃぎ、英語はどうか下駄を履かせてもらったと曝露し、僕の英語の赤点を見て「親子やな～」と、笑い転げていた。そして僕の卒業式には、看護学校の授業は休めないからと来なかった。でも僕は平気だった。母の毎日夜遅くまで勉強して若い子に必死についていく姿を見ていた。時には血圧のマンシエットとやらの不慣れな手つきで異様に締め付けられ悶絶した僕だ。

そして今の僕の目標は、看護師の卵である母を助けるために、看護職向けのロボットを製作することである。大阪のロボット専門学校に通いながら、母の背中を追いかけている自分を、とても誇らしく思っている。そんな母にエールをおくりたい。ありがとうおかん！これからもお互いがんばろうな！

こんな作文を見たら、頑張る以外の何があるのだろうか。追いつかれないように頑張る。